



① 山崎成美 《No.6》-紙を通り過ぎた馬-

2013 | 紙、麻紐、ニス、染料、膠、赤ワイン、ハトメ、リング
3500mm × 1000mm × 450mm

山崎成美は、紙を用いて動物などの造形物を制作しています。その作品は「実際には遠く離れていようと、動物が側にいる世界に身を包む造形を求めたことから展開して」います*1。「紙に馬を描かなくても、紙の断片に馬の気配を感じるような*2」表現ができないかと、羊皮紙をヒントに形づくられた実物大の「紙の馬」。それを革ができるプロセスをなぞり解体するなかで生まれた作品が本作です。そのプロセスには、馬の痕跡を描こうとすることが貫かれています。そうした過程の重ね合わせによって成り立つ本作からは、事物と身体を結びつける行為を手繰りよせることができるでしょう。[M.I.]

1 | 山崎成美「環境としての作品——事物を身にまとうこと」2014

2 | 山崎成美「紙を通り過ぎた馬——モノと身ぶりから生まれる非現実」2021 (QRコード参照)



③ 木内俊克 《surface》

2021 | インスタレーション

定点カメラはそこから見える領域と見えない領域の二つを生み出す。人間は動くことで見えない領域を減らし、それでも見えない領域を見る領域の足し合わせから想像し、補完する。《surface》は、動かない視点で、見える領域による見えない領域の補完操作だけを取り出し、空間に転写する試みだ。見える領域の撮影は、一定のインターバルで行われる。出入りする人々や物の光や影が定着されていくが、見えない領域は見えないまま。かくして見えない領域には、見える領域として蓄積されていく画像のみがゆがめられ、重ね合わせられ、隙間を埋めるように貼り込まれる。会期中、撮影と転写は数度繰り返される。[T.K.]

② 永田康祐 《Sierra》

2017 | ミクストメディア | サイズ可変

Sierra (シエラ) とは、MacOS のバージョン名です。その由来となったカリフォルニア州 (アップル本社所在地でもある) のシエラネヴァダ山脈。コンピュータが起動すると、通常、背景であるはずのデスクトップ画面のシエラネヴァダ山脈が動きだし、土地の歴史の説明映像が自動音声で展開されます。また、移動する Google ストリートビューの画像とともにシエラネヴァダ山脈にかかわる、西部開拓時代のある家族のドラマも個人的なモノローグとして語られます。観客は、インターネットに接続されたコンピュータという土地を旅するように出来事を体験しているとも言えます。コンピュータの世界から再び見いだされた、これらの特異な場所を彷徨うときたしかに生起する感情は、どのような主体に宿るものなのか。その不確かさを本作は静かに問いかけてくるようです。[M.I.]

※上演空間での展示のため展示作品の鑑賞が困難な場合があります。ご了承ください。

※QRコードから作品の記録映像をご覧ください。



④ 神村恵 《STREET MUTTERS 〈青山編〉》

2021 | シングルチャンネル・ビデオ | 8分43秒

路上にある標識や表示を観察・採集し、その意味や指示を受け止め、それに従い自発的に動かされてみる短編映像作品シリーズの青山編。[M.K.]

出演・撮影：神村恵、木村玲奈

編集：神村恵

助成：公益財団法人セゾン文化財団

機材協力：時里充

※QRコードからも作品映像をご覧ください。

